

ノルドストロム、カール ヨハン「日本映画を海外へ」

視覚文化は国の大使として驚くほど力があると思う。その国に対する人の興味を喚起するもので、映画や映像より強い影響があるものを私は知らない。

幼いころ、1970年代や1980年代の日本アニメをレンタルビデオで借りて見たのが、私の日本の映画や映像文化の初経験だった。以来ずっと日本の映画やアニメへの興味は強い。松本零士の『銀河鉄道999』の鉄郎が経験する過酷な人生や、『SF西遊記スタージンガー』のメインキャラクターに扮して遊んだ思い出、『宇宙戦艦』の壮大な世界観、それらが鮮明に幼い心に焼き付いた。その他、『グレンダイザー』『ベルサイユのばら』『コブラ』『マクロス』『宇宙戦艦ヤマト』『キャンディ・キャンディ』と、私を虜にした作品を数え上げたらきりが無い。少し成長して、スウェーデンのテレビでも放送された黒沢明の『七人の侍』『用心棒』『椿三十郎』小津安二郎『東京物語』などの作品と出会う。子供ながらに黒澤監督作品に出てくる三船敏郎の様な強い人になりたくて、でも何よりも、僕が日本と言う国についてもっと知りたくて、何時か日本を訪れたいという日本への想いが強くなった。

大人になってから映画祭やスウェーデンのフィルムセンターで成瀬巳喜男や小林正規や清水宏などが監督した作品を見て、また映画館で現代の日本監督の新作も見るようになった。この様な経験が無ければ、私が日本語や日本文化を研究することはなかったかもしれない。

ある国の視覚文化を海外に広げる方法はいくつかある。一番多く使われているのは利益を得ることを目的として、その国の視覚文化を商品として海外に向けて販売している企業だろう。また現代美術館、映画祭、国営テレビなど、映画を広めるために働いている文化団体もある。世界的な文化交流のプロセスをスムーズにするために、これらは非常に重要な役目を果たしているのである。

現代の世界では、インターネットさえ繋がってれば、国の映像文化や映画を世界中の人々に広げることが出来る。デジタル革命によりもたらされた革新的な方法は、正にかつてないスケールで各国の文化を国際的に広めた。

今私は、日本で日本映画の専門家としてアカデミックな活動をしている。そして自分が日本の映画を研究するばかりではなく、その視覚文化を広める事ができる立場にいる。キュレーターとして、東京国立近代美術館フィルムセンターと協力して幾つかのプログラムを作って海外に紹介した。今年のボローニャ復元映画祭では1930年代の松竹製作所の初期トーキー映画特集を企画した。また母国スウェーデンの映画も、日本に持って来て日本の映画ファンや観客に紹介した。無声映画の活動弁士、片岡一郎氏と共に企画

しコーディネートしたプログラムは、世界最大の無声映画祭、イタリアのポルデノーネ無声映画祭で観客から大きな喝采を博した。その結果翌年の映画祭から公式に招待を受けることになった。

映画を見た会場の観客からは、熱狂的で興味深い反応があった。普段見られない珍しい映画を観たいから観客が喜んで行く。関わらせていただいている映画祭には、世界中から多くの観客が訪れる。上映後の質疑応答では、文化的な違い、登場人物の行動の動機や、映画製作の背景など、質問が後を絶たなかった。時に、こんな事までみているのか、と感心させられるほど、細かい点を聞かれる事もある。実感できたのは、日本の視覚文化が海外の人に受け入れられる、まさにその瞬間に立ち会えるというのが、いかに素晴らしいかということである。

また、興味が尽きないのは、他国の文化が鏡のような役目を果たして、私たち自身の姿を映し出してくれるからだ。昔の映画は興味深い文化財である。そこから私たちの過去や歴史も生き返る、自分の目で見られる。たしかに、将来を視野に入れた現在を理解するために、過去を思い起こし学ぶ事は必要だとは言えるだろう。

映画や視覚文化は、国と国をつなぐ文化的な強い架け橋であると、私は映画祭などの企画と映画研究の経験から分かって来た。過去、現在、未来。すべてがそこにある。感動させる映画や意欲をそそる映画や興味深い映画を上映すると、観客がそれを製作した国や文化について興味を持つだけでなく、自分の国の社会的規範や文化的規範について、顧みる事も出来る。国と国の間の協調や調和関係を良くするために、文化交流は一つの良い方法であると思う。